

芳川筍之助翁を悼む

柳田 義一



僕達の大先輩芳川筍之助翁は老衰の為去る五月二十四日午後九時眠るが如く齢九十の御高齡を以て遂に天国に召された。天寿を全うされたとは申せられわれにとつてはかけがえのない生字的な存在でいつまでもこの地上に残って戴きたかった御一人である。心から哀悼の意を表します。

聖書にかけて悼む囀りのやまりに

知性豊かなあの温顔、一見申すならば英国風の紳士にも優る面影、容姿は老齡にも似ず若々しさとその気構えには周囲の者を恒に引きつけさせられた。而して終始愛情と思ひやりの人生航路を通されたと申しても過言ではない。

ざっと御経歴を申すならば明治十一年三月二十六日大阪市南区順慶町に於て芳川芳橋(筍村)氏の長男として生まる。長じて明治二十三年大阪府中学校(北野高校前

身)に入學されたが心臓病に冒され三年にて中退されたが爾來母堂の郷里大和飛鳥村で専心加療その甲斐あって全治された。父君筍村先生は有名な漢詩の巧みな国文学者であられたとは反対に若くして特に英語を好まれ、独学して將來貿易界へ志すことがこの頃からの抱負であつた。稍々長ぜられ明治二十七年大阪市南区安堂寺町の明治銀行に就職、事務見習をされたが明治三十年待望の貿易入門の機が訪れたと申すのか、神戸市居留地イリス商会に勤められることになった。それから四年目の明治三十四年十一月、失明の父君を伴い生田区中山手通七丁目測候所山麓に居を移され専ら孝養の誠を尽された。

この頃鈴木商店には外国商社であるラスベやイリス等に居られた上田貢太郎氏、足助太郎氏、森衆郎氏、井田亦吉氏、北村和三郎氏、香氏、倉敷定次郎氏、香川潔氏、加藤廉之助氏等の俊才が続々と這入って來られた。明治四十年一足先きに鈴木入りされた香川潔氏の推薦で芳川翁も参

劃の一員に加えられた。特に鈴木商店旭日昇天の意気に燃える中、芳川青年は海外貿易に乗り出す礎石造りに懸命の努力を払われた。明治四十二年ロンドン支店開設に當りては、単身シベリヤ經由渡英され馴れざる異國の慣習にも耐え世界の商取引に万全を尽くされた御功績は数え切れない。明治四十四年高畑誠一氏ロンドン支店長に赴任と決まるや帰朝されることになった。本店のデスクに就かるや外国電信部、洋糖部主任を担当、傍ら店内青年の人間作りを注がれた事も見逃すことが出来ない。即ち鈴木早朝登山部の総指揮者であつて、市百百合薫の再度山に一年三百回以上の登山を続けたものに自ら褒賞を授けられた。この間砂糖の中心地である爪哇出張所にも漸時派遣され数名の社員の陣頭指揮を行われた。その後鈴木商店の支配人を仰せつかるや一層柳田、金子両翁を弱け緊密なる動議に力を捧げられた。大正十一年浪華倉庫社長として就任大阪に毎日通勤されることになった。

昭和二年四月晴天の霹靂鈴木商店の解散の運命に止むなく退社、その後神戸市須磨沢田清兵衛氏方に十年ばかり身を寄せられた。このころが二人は、いまの言葉でいえば、批判力に富んでいたといふのか、若い癖に世間を見る目が発達していたのであつた。そのため話題も合えば、気持も深く触れあつたのであつた。

大正七年に一ツ橋を卒業して以來、ともに五十年の永い間、社会人生活を送ってきたが、そのなかでの四十年近くを、君と私は共通した職場で、働いたのであつた。それだけにその関係は、個人的にもまた職場を介しても、実に密接であつた。

西川文蔵氏(号・脩竹)と父の親善関係

芳川 筍之助(遺稿)

芳橋が大阪より神戸に移転して來たのは明治三十四年十一月で中山手通七丁目の借家で宇治野山と云う高台の麓であつて借家から見上げると神戸測候所と豪華なる住宅と二軒並んでありました。住宅は鈴木商店の支配人西川文蔵氏の御宅で書画好きということが後で分りまして、日ならずして互に御心安くなりお開の節は御收藏の書画を觀せて貰ひ互に喜び合いました。御趣味も高尚で、時折お茶を頂きました様です。或時は筍村に揮毫を求められ「松濤茶寮」「緑竹青々居」の二様の茶旗を掲げて茶会を催され同好の雅会を催され一日の閑雅の会を催された事もあ

を大往生の日まで規則正しく過された。特に亡くなる寸前故西川文蔵さんの五十回忌が来春五月におとずれることを気にせられ左記の一文を未完ではあるが走り書きを遺されたことも思えばよなき偲び草とはなつた。(四三、六、二、告別の日)

りました。北村横濱支店長の談に、唐の祝世祿の名幅を手に入れ愛蔵日あり跡断の二字如何にしても判読し難く多くの斯会の人に質すも未だ適確なる解を得られず在再日を経ました。予一日西川氏を訪ひ右幅を展覧せられ右二字は依然難解なりとて氏甚だ遺憾の色あり、予曰く筍村先生失明されているが試みに先生へ質しては如何と、氏大いに之を賛し予に其使命を托す。仍て先生を訪ひ字形筆法を説明して教を乞う、先生其全文を読むべく命ぜらる。以て依て七絶全文を暗らんにて平仄、韻字の關係を探り沈吟少時、曰く、ソレは跡断とある

業を行なつた。その仕事は、同社の取扱う年間三十万トン以上の燐鉱石の直輸入に関する、船舶その他一切であつた。その後昭和十九年、わが社が海軍の要請で、B29邀撃のためのロケット戦闘機秋水(ドイツのメッサーシュミット163Bの設計図による)の燃料、超濃厚過酸化水素、秘称(㊟)(マルロ)を製造することとなつたが、その製造には多量の石炭を必要とする。しかしこれを輸送する手段が帝人にはなかつた。

「梶山君を憶う」

大屋 晋三



梶山増吉君と私の交遊は、大正三年一緒に一ツ橋の校門をくぐつた時に始めて、爾來実に五十年の長い間、一貫してかわることなく、深い友情が続いて

いた。想い起せば、全国から青雲の志を抱いて集つた若者のなかに、頬が赤く丸顔で、広島弁を丸出しにして憚らない青年がいた。その青年と何となく気が合つて、つきあうようになったのだが、それが梶山君であつたのである。

それから二人は、大いに意気投合して、いわゆるウマが合つたともいふか、非常に親しい友情を交わすようになった。それは何故かという、二人とも真面目に、コツコツ勉強に精励するタイプではなく、むしろズボラといった方が

大正七年に一ツ橋を卒業して以來、ともに五十年の永い間、社会人生活を送ってきたが、そのなかでの四十年近くを、君と私は共通した職場で、働いたのであつた。それだけにその関係は、個人的にもまた職場を介しても、実に密接であつた。

君と私は、当時新興の意気に燃えていた神戸の鈴木商店に入り、君は一時神戸製鋼に配属されたが、間もなく本店に帰つて、倉庫部で働くこととなつた。そしてこれが、その後の君の終生の事業となつたのであつた。

ともに鈴木商店に勤めること十年、その鈴木商店の破綻した後は、君は同僚とともに、カナタツ海運合資会社を設立して、その代表社員となつて、大日本人造肥料(現在の日産化学肥料)の荷扱

業を行なつた。その仕事は、同社の取扱う年間三十万トン以上の燐鉱石の直輸入に関する、船舶その他一切であつた。その後昭和十九年、わが社が海軍の要請で、B29邀撃のためのロケット戦闘機秋水(ドイツのメッサーシュミット163Bの設計図による)の燃料、超濃厚過酸化水素、秘称(㊟)(マルロ)を製造することとなつたが、その製造には多量の石炭を必要とする。しかしこれを輸送する手段が帝人にはなかつた。

そこで私が、戦争のため鉄鉱石の輸入ができなくなつて、カナタツ海運を解散していた君に頼んでその海上輸送を、引き受けてもらうことになつた。これは当時の統制経済下の困難な状況の下にあっては、時には闇でも船を動かして、少しでも多く石炭を入手することが必要であつた。帝人が闇をするわけにはいかない、いざという時には、君が犠牲になる覚悟で、親友の私のために、一肌ぬ

いたのであつた。君は、戦後は、この時集めた船で、帝人の原料の運送の仕事を担当していたが、昭和二十二年三月これに帝人の保険代理権を加えて、資本金十九万五千円で国華産

べき様に思われます。忽ちにして難解のナゾは氷解直ちに之を西川氏に報ず、此時の氏の喜び様は今も猶予の忘れ難きところなり、千百の目明きは終に失明の一老先生に及ばず西川氏も嗟嘆之を久しくしたという挿話もありました。明治の終頃には氏の収集山を為し来るに連れ刊行の意図を起され、コロタイプに印刷に附し同好の友に分たれ皆様喜びと驚きの種となつた。其帖を清風帖と銘名せられ筍村先生に其の序文を書く様御依頼があつた。筍村先生も御辞退するに困つたが風雅の為に承諾したが、ほとんど盲目の為、其序文の中に果せないで西川氏は迷惑に思われたが氏の雅友で能筆の李軒先生に代筆を懇願せられ快諾を得られた、そこで筍村先生は云つた「序文の詞……」

兵右衛門経営の明新学校の手伝つることあり、明治四年頃塾を大阪の船場に開き各階の人に漢学、作詩等を教授し、書画は自分の趣味として古人を学ぶ事を習う事を為し、六十一七十才に至る。遂に眼を病み孤独を感じ塾を閉じ、神戸在住の筍之助と同居する事を決心明治三十四年十一月神戸に住居を求め、中山手通七丁目通俗宇治野山という高台を見上げる所に住む。

其所には神測所と(池田勤兵衛邸)富豪の二軒のみ、其一軒は神戸の貿易商鈴木商店支配人西川文蔵氏(号竹軒)なる事を知る。何時か知己となり、書画愛好なるを知り同氏の閑の日には御相手に書画を談じ共に楽しむ。或時同店横浜支配人北村和三郎氏の話に、西川氏は唐の有名な祝世祿の書幅を買われたが其内二字跡残の二字

北村氏の談、猶不思議なることは筍村は大正九年一月流行のインフルエンザ一月十一日

宿痾胃カキヨウ癒えず同年五月遂に他界せられた事にて明年が兩人とも五十回忌に當る……

父芳川筍村(号)幼名は吉太郎吉川善右衛門の長男として大和笛堂村に生る。農を嫌い幼時は描写を樂しむ。十六、七才の頃家出する事二回、因て大阪在住の叔父大阪に連れかえり書を読み書画を學ばしむ、大阪饒谷誓待寺の住職加藤鉄九師の勧めに因り分後日田咸宜園に學ばしむ、之より先九州に遊學し明治初年帰郷す、兵庫神田

西川文蔵氏は(中略)

……

……

……